

数々の呼称で知られる伊予の名刹

# 護国山 高昌寺を 訪ねて



五七〇年の歴史を誇る伊予の名刹。かつては曾根家の菩提寺として栄え、廻廊を配した造りから、本山、永平寺になぞらえて「伊予のミニ永平寺」と称される。文化五年（一八〇八年）の再建では、時の藩主大洲藩二代、加藤泰興公より賜った楠の銘木を材としたことから、別名「楠寺」とも呼ばれる。近年は、日本最大の石造ねはん仏が話題を呼び、「内子のねはんさん」としても親しまれている。

本堂（奥）と中雀門（手前）●本堂の屋根は創建当時茅葺きであった（現在は銅板葺き）。中雀門の左右に廻廊が続く。門は町の有形文化財指定



山門●文化4年（1807年）の火災で唯一焼失を免れた門。旧五城村中土の持宝院から1750年頃移築されたと伝えられる



山門内部に祀られている釈尊

廻廊●僧堂側に続く廻廊。本山、永平寺を模した造りから「伊予のミニ永平寺」とも呼ばれる



## 内子の北の丘陵地に建つ 曾根家の菩提寺

その歴史は、今から五七〇年前の嘉吉元年（一四四一年）にさかのぼる。防州（現、山口県）、泰雲寺の覚隠禪師門下の十哲、大功円忠和尚が現在の内子町松尾地区に創建した浄久寺が起りとし、その後、天文二年（一五三三年）、現在の地に移された。寺は、時の領主曾根城主従五位下、曾根高昌公の帰依を賜り、曾根家の菩提寺として栄えた。また、内子の北の丘陵地という立地から門前には市が立つなど、繁栄を遂げ、末寺は二十四カ寺が開かれた。

高昌公の逝去後、その諱をとって寺号を高昌寺に、山号は元文五年（一七四〇年）護国山と改められ、「護国山高昌寺」と改称された。

しかし文化四年（一八〇七年）の火災により、創建当時の伽藍は山門、本尊以外すべてが焼失。その翌年、二十三世・興嶽凡隆和尚の尽力によって再建が図られたが、莫大な資金調達には曾根家の子孫や檀信徒からの援助に加え、二十三世自らも托鉢に回ったと伝えられる。



取材にご協力をいただいた皆さま。  
左から、林証道師、高嶋龍仙師（共に愛媛県曹洞宗青年会広報部）、高昌寺四十一世・高嶋武彦老師、大村博氏（高昌寺総代長・郷土史家）